大東文化大学学術シンポジウム
日本中国語学会　関東支部第二回例会

発表要旨

発表１：李鵬（大東文化大学・院）

「中国語結果複合動詞の生成部門――統語部門か語彙部門か？」

本発表は“打开”（押し開ける）、“追累”（追い疲れる）、“哭湿”（泣き濡らす）等結果を表す複合動詞(RCV)の生成部門について議論する。GB 理論の時代での研究の殆どは RCV の生成部門は統語部門であるとされていた。即ち、前項成分と後項成分は D 構造において別々の動詞句を投射し、両者は移動をへて前後がくっつき、ひとまとまりの動詞が形成すると主張している。これに対し、極小理論、即ち MP の考えでは D 構造を破棄し、できるだけ発話されるそのままの形で音韻部門へ出力させようという傾向にある。そのため、RCV は最初から語彙部門で前項成分と後項成分がくっついた形で生成されるという考え方を取る。本発表では、RCV は実際には語彙部門と統語部門の両方で生成されるのであり、どちらかに偏っているものではないという中間的立場を取り、語彙部門と統語部門双方での分布状況を示す。

発表２：藤本健一（大東文化大学・助教）

「丁韙良の法律新語――《萬國公法》からの変遷を中心に」

国際法をはじめて体系的に中国に紹介した丁韙良（W.A.P.マーティン）は《萬國公法》（1864）以降、漢訳書と著書を６種も公刊した。マーティンは京師同文館の総教習を務めるなど翻訳家および教育者として中国における国際法の普及に多大な功績を残した。彼の著訳《萬國公法》（1864）から《公法便覧》（1878）、《公法會通》（1880）、《陸地戦例新選》（1884）、《公法新編》（1902）、《邦交提要》（1904）までは 40 年間に跨っており、晩清当時の法律新語の発展の趨勢を辿るには非常に有意義な文献と言えよう。

本報告ではマーティンの手になる法律新語の浸透状況と一部用語の変遷を中心に考察する。特に注目したいのは戊戌政変後に大量に中国に押し寄せた和製法律新語をマーティンが如何に自著に取り入れたか、または使用を避けた背景に何があるのかを検討したい。

発表３：吉田慶子（大東文化大学）

「翻訳と中国法の近代化――日中法律文化交流の観点から」

19 世紀から近代法の時代になり、当時を世界的に俯瞰する場合、アジア地域の国は近代西洋型法制を有する国のみが対等に欧米諸国と外交関係を結ぶことができ、それ以外は欧米列強の植民地か、不平等条約を強いられる形になっていた。

日本は、明治維新により西洋法の大規模な翻訳を行われ、脱亜入欧の道を選んだ。一方、時代の流れに乗り遅れた中国は、不平等条約の改正、半植民地からの脱出、最終的には救国などの必要に迫られ、日本法とドイツ法の翻訳を起点として、後を追う形で漸く近代法の道を歩みだすことになった。

本発表は、1830～64 年のアヘン戦争前から『万国公法』出版までを中国近代法の萌芽期、1864 年の『万国公法』出版から 1902 年を準備期、1902 年の沈家本、伍延芳の修訂法律大臣の任命、修訂法律館の設置から 1949 年中華人民共和国成立までを形成期と時代区分し、約百年の間、日中間の法律文化交流に焦点を当て、具体的にだれが、どのような方針で、どんなものを翻訳し、そして今日にどのような影響を与えているのかを探求し、それぞれの時代の翻訳手法の違いも比較する。

発表４：鈴木武生（跡見女子大学・非）

「構文と情報構造――動詞コピー構文を中心に」

本論では Lambrecht (1994) による情報構造の観点から普通話および台湾閩南語の動詞コピー構文（动词拷贝句 / 重动句）について論じ、構文が持つ意味と形式の関連性について探る。普通話動詞コピー構文は主動詞（V2）のコピー（V1）がその左方位置に出現する形式で、さらに V2 が種類の異なる補語要素を従えることで数種の下位部類を構成する構文群をなす。この構文については、伝統文法、統語論、意味論などさまざまな側面から研究されている。特に語用論的研究においては、项开喜（1997）の「超常量」解釈が代表的ではあるが、これでは十分に説明できない例も多い。一方台湾閩南語動詞コピー構文の文法制約は普通話のそれとは大きく異なり、普通話では非文法的となる形式を表現できる。本論ではこうした文法制約の違いが生じる原因を、情報構造における違いに求め、両者の情報構造の違いを比較考察する。そしてこれら二つの構文がほぼ同一の統語形式で実現されるにも関わらず、制約と解釈が異なる理由について、これらの情報構造がそれぞれ異なる語用論的意味をエンコーディングし、かつ重層的な構造解釈が関与している可能性があることを述べる。

発表５：陳玥（東京大学・院）

「「V 起来」と「V 得」構文の意味機能に関する考察」

現代中国語の「NP+V 起来+AP」構文と「NP+V 得+AP」構文について、“V 起来”を用いた“今天的新干线坐起来很舒服”では、連体修飾語の「今天的」を削除しても問題なく成立するが、“V 得”を用いた“今天的新干线坐得很舒服”では、「今天的」は削除できず、“新干线坐得很舒服”は非文となる。「V 得」構文に関しては盛んに議論が行われてきたが、その多くは動詞接尾辞「得」の前後にある V と AP の意味関係に関する考察であった。本発表では、動作対象を表す主語が裸名詞の時になぜ二つの構文の間に違いがみられるのか、「V 得」構文の主語に立つ名詞句がそうした制約を受ける意味論的根拠は何なのかについて考察する。

発表６：田村　新（首都大学東京・非）

「清末民初の中国人による量詞研究について」

拙稿 2009 では、1920 年代前半に中国語白話文法を記述した著作における品詞や助動詞に関する記述の他、量詞に関する記述を考察し、黎錦熙 1924『新著国語文法』で初めて量詞という術語が使われたのではないかとの結論に至った。本発表では、1920 年 4 月『白話文做法』、『教育雑誌』第 13 巻（1921 年）第 10 号に掲載された何仲英「国語分量詞的研究」などの白話文法を記述した著作、さらには馬建忠 1898『馬氏文通』、來裕恂 1906『漢文典』、章士釗 1907『中等国文典』等、文言文を記述した文法著作にまで調査の対象を広げ、白話文言を問わず清末民初に中国人が量詞をいかに研究してきたのかについて考察したい。

講演１：伊藤さとみ（お茶の水女子大学）

「疑問文中の語気助詞“呢”の機能：疑問演算子か対照話題マーカーかをめぐって」

現代中国語の語気助詞“呢”を巡っては、それが疑問詞であるかどうかの論争や、会話・談話における機能についての多数の研究がある。本発表では、それらのうち、形式言語学の立場からの研究に絞り、以下の二つの説を紹介する。一つ目の説は、生成文法の枠組みにより、中国語の疑問詞は不定詞（indeterminate）であるという前提の下に、“呢”は不定詞を束縛して疑問詞としての力を与える疑問演算子であるとするものである(Cheng 1991)。二つ目の説は、形式意味論の枠組みにより、“呢”は、英語の B-Accent と同じ機能、即ち談話の情報構造（QUD）において対照話題であることを示すというものである(Constant 2014)。本発表では、どちらの説も、疑問文における“呢”の働きを説明するには不備があることを述べ、“呢”を伴う疑問文は、通常の疑問文と異なり、当該の会話の共通基盤(Common Ground）における、話し手の認識的偏り（Epistemic Bias）を表すと定義する。

講演２：山口直人（大東文化大学）

「中国語生成文法の可能性」

生成文法は誕生以来、半世紀以上にわたって影響のある言語理論として様々な言語の分析に用いられてきた。中国語においても例外ではなく、第 1 期理論である「標準理論」、第 2 期理論である「GB 理論」、第 3 期理論である「ミニマリスト・プログラム」といったすべての生成文法理論は中国語研究と互いに影響を与えあう形で発展し、現在に至っている。しかし残念ながら、日本の中国語学界においては生成文法を使った中国語の分析はさほど普及していないのが現状ではないだろうか。本発表では、日本の中国語学界のこれまでの生成文法との接点をふり返り、ミニマリスト・プログラムの枠組みを使って中国語で書かれた初めての網羅的な研究書である何元建 2011 を取り上げ、その中で扱ってある以下の事柄について簡単に紹介することで、中国語生成文法の今後の可能性について探ってみたい。

１．二股枝分かれ　２．軽動詞（VP シェル）　３．量化（論理形式）　４．動補複合動詞